

2010年感染症発生動向調査 (患者発生動向)

— 全数把握感染症 —

中嶋 智子 奥村 真友美 柳瀬 杉夫

Annual Surveillance Report of Notifiable Infectious Diseases in Kyoto Prefecture (2010)

Satoko NAKAJIMA Mayumi OKUMURA Sugio YANASE

2010年、全数把握対象75感染症中20感染症で810人の患者報告があり、そのうち京都市以外の京都府管轄保健所管内からの報告は330人であった。京都府全体では結核583人、腸管出血性大腸菌感染症88人、アメーバ赤痢25人、後天性免疫不全症候群21人、レジオネラ症19人の順で多く、近畿2府4県や全国の結果と同様であった。2010年は、急性脳炎やA型肝炎の報告例が比較的多かったこと、ライム病患者が2人、京都府内で初めて報告されたこと、京都府管轄保健所管内では腸管出血性大腸菌感染症が多かったことなどが特徴であった。2007年から2010年の動向も併せて考察した。

キーワード：京都府感染症発生動向調査、全数把握感染症

key words：Kyoto prefectural infectious disease surveillance, Notifiable infectious disease

はじめに

感染症発生動向調査の患者発生動向調査は、日本国内の感染症サーベイランスシステムの1つであり、1999年4月から、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」の施行により、法令に位置づけられている。京都府では、京都府保健環境研究所内に感染症情報センターを設置し、医療機関から保健所に報告された感染者の発生動向情報を集計し、その解析結果を毎週公開している*1。

全数把握感染症とは、医師または獣医師が感染症と診断したときに厚生労働省令で定める内容を最寄りの保健所長を通じて都道府県知事に届け出ることが義務づけられている75感染症（2011年4月現在）を指す。病気の重篤度、感染力、感染経路などにより、一類から五類感染症と新型インフルエンザ等指定感染症に分類されている。

本資料では2010年第1週から第52週までに保健所から報告され、2011年3月までに確定した全数把握感染症810件について、その発生動向をまとめ、報告する。

材料と方法

感染症発生動向調査システム(NESID, National Epidemiological

(平成23年7月31日受理)

*1. 京都府感染症情報センターホームページ

<http://www.pref.kyoto.jp/idsc/>

*2. 推計人口資料

京都府：2010年10月1日現在の京都府推計人口

<http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/suikējīnkou/suikēifiles/jikei.xls>

国：総務省統計局の平成22年国勢調査の速報資料

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/jinsoku/zuhyou/jinsoku.xls>

Surveillance of Infectious Diseases) で集計され、2010年第1週から第52週までに保健所を経由して医療機関から届出があり、2011年3月までに確定した感染者情報を使用した。

当該感染症の感染率は、国や京都府の推計人口*2を用いて、人口10万人あたりの感染者数を計算し求めることとした。また、年齢階級別人口は平成17年度の国勢調査結果を用いて、感染率を計算した。なお、ここでは無症状病原体保有者も感染者数に含まれるため、罹患率という言葉を用いず、感染率という用語を用いた。

また、京都市を除く京都府内の保健所管内から（以下、ことわりのない場合は「京都府内」と記す）の個々の患者発生の詳細情報を用いた。

結果と考察

1. 概要

京都府の全数把握対象感染症の患者数を保健所別に表1に示し、併せて近畿2府4県と全国の結果も示した。京都府では2010年に75感染症中20の感染症で810人の患者報告があり、京都府内330人、京都市480人であった。保健所管内ごとの報告数は、人口に比例して報告数が増加する傾向がみられ（図1）、本サーベイランスが適切に実施されていることが確認できた。

一類感染症の報告はなかった。二類感染症のうち、結核は583人で2009年の670人¹⁾、2008年の647人に比べ^{2,3)}、新たな感染者の報告数が減少した。急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群（SARS）、鳥インフルエンザ（H5N1）の報告はなかった。三類感染症は細菌性赤痢3人、腸管出血性大腸菌感染症（以下「EHEC症」と記す）88人、パラチフス3人の報告があった。コレラ、腸チフスの報告はなかった。四類感染症はE型肝炎2人、

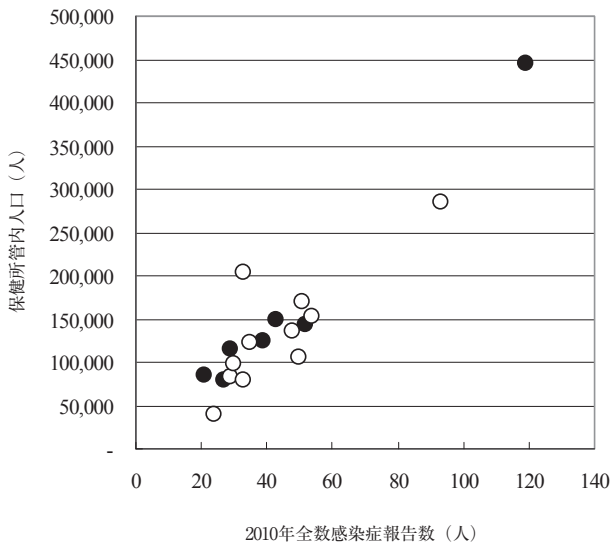


図1. 保健所管内人口と全数感染症報告数の関係
○, 京都市保健所; ●, 京都府管轄保健所

A型肝炎 7人、デング熱 5人、マラリア 5人、ライム病 2人、レジオネラ症 19人の報告があり、その他の報告はなかった。五類感染症のうち、アメーバ赤痢 25人、ウイルス性肝炎 4人、急性脳炎 15人、クロイツフェルト・ヤコブ病 4人、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 3人、後天性免疫不全症候群 21人、ジアルジア症 1人、髄膜炎菌性髄膜炎 1人、梅毒 8人、麻しん 11人の報告があった。クリプトポリジウム症、先天性風疹症候群、破傷風、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、風疹の報告はなかった。指定感染症等の報告はなかった。

表2に京都府内、京都市、京都府全体で報告があった20感染症の近畿2府4県の総計と全国総計については患者報告数が多い順に上位10感染症の感染率をそれぞれ示し、表3に保健所別の感染率を示した。京都府全体の上位5感染症は、近畿2府4県や全国も同じであった。

京都府内と京都市の患者発生を比較すると、都市域で発生が多いとされる結核、後天性免疫不全症候群、アメーバ赤痢、梅毒などは京都市で多く、京都府内では比較的小さい傾向があった。マラリアは京都市のみの報告で、ライム病とE型肝炎は京都府内のみの報告であった。

表2. 2010年全数把握感染症患者発生感染症の感染率と全国、近畿二府四県上位10感染症との比較

京都府内 (京都市を除く)				京都市			京都府全体		
順位*	感染症名	感染率** (患者数***)		順位	感染症名	感染率 (患者数)	順位	感染症名	感染率 (患者数)
1	結核	19.3 (224)		1	結核	24.3 (359)	1	結核	22.1 (583)
2	腸管出血性大腸菌感染症	4.6 (54)		2	腸管出血性大腸菌感染症	2.3 (34)	2	腸管出血性大腸菌感染症	3.3 (88)
3	レジオネラ症	0.77 (9)		3	アメーバ赤痢	1.2 (18)	3	アメーバ赤痢	0.9 (25)
3	麻疹	0.77 (9)		4	後天性免疫不全症候群	1.2 (18)	4	後天性免疫不全症候群	0.8 (21)
5	アメーバ赤痢	0.60 (7)		5	レジオネラ症	0.68 (10)	5	レジオネラ症	0.72 (19)
6	急性脳炎	0.52 (6)		6	急性脳炎	0.61 (9)	6	急性脳炎	0.57 (15)
7	A型肝炎	0.34 (4)		7	梅毒	0.41 (6)	7	麻疹	0.42 (11)
8	後天性免疫不全症候群	0.26 (3)		8	マラリア	0.34 (5)	8	梅毒	0.30 (8)
9	E型肝炎	0.17 (2)		9	デング熱	0.27 (4)	9	A型肝炎	0.27 (7)
9	ライム病	0.17 (2)		10	A型肝炎	0.20 (3)	10	デング熱	0.19 (5)
9	ウイルス性肝炎	0.17 (2)		10	クロイツフェルト・ヤコブ病	0.20 (3)	10	マラリア	0.19 (5)
9	梅毒	0.17 (2)		12	細菌性赤痢	0.14 (2)	12	ウイルス性肝炎	0.15 (4)
13	細菌性赤痢	0.09 (1)		12	パラチフス	0.14 (2)	12	クロイツフェルト・ヤコブ病	0.15 (4)
13	パラチフス	0.09 (1)		12	ウイルス性肝炎	0.14 (2)	14	細菌性赤痢	0.11 (3)
13	デング熱	0.09 (1)		12	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0.14 (2)	14	パラチフス	0.11 (3)
13	クロイツフェルト・ヤコブ病	0.09 (1)		12	麻疹	0.14 (2)	14	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0.11 (3)
13	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0.09 (1)		17	ジアルジア症	0.07 (1)	17	E型肝炎	0.08 (2)
13	髄膜炎菌性髄膜炎	0.09 (1)					17	ライム病	0.08 (2)
							19	ジアルジア症	0.04 (1)
							19	髄膜炎菌性髄膜炎	0.04 (1)

近畿2府4県				全国			
順位	感染症名	感染率 (患者数)		順位	感染症名	感染率 (患者数)	
1	結核	18.0 (3759)		1	結核	20.9 (26704)	
2	腸管出血性大腸菌感染症	3.3 (681)		2	腸管出血性大腸菌感染症	3.2 (4131)	
3	後天性免疫不全症候群	1.7 (345)		3	後天性免疫不全症候群	1.2 (1549)	
4	アメーバ赤痢	0.8 (160)		4	アメーバ赤痢	0.7 (845)	
5	レジオネラ症	0.6 (125)		5	レジオネラ症	0.59 (751)	
6	梅毒	0.43 (90)		6	梅毒	0.48 (621)	
7	麻疹	0.28 (59)		7	麻疹	0.36 (455)	
8	急性脳炎	0.28 (58)		8	つつが虫病	0.32 (406)	
9	A型肝炎	0.24 (50)		9	A型肝炎	0.27 (346)	
9	デング熱	0.24 (50)		10	デング熱	0.19 (245)	
9	ウイルス性肝炎	0.24 (50)					

* : 順位は患者数が多い順に京都府内はすべて、近畿2府4県と全国は上位10感染症までを示した。

** : 感染率は2010年10月1日現在の京都府推計人口と総務省統計局の平成22年国勢調査の速報資料を用いて、人口10万人あたりの患者報告数として示した。

*** : 患者数は表1から再掲した。

表 3. 2010 年の全数把握感染症の保健所別感染率

感染症名	保健所別の感染率*																		
	乙訓 山城南 中丹西 山城北 南丹 中丹東 丹後								京都市										
	北	上京	左京	中京	東山	山科	下京	南	右京	伏見	西京								
結核	22.1	23.6	21.3	18.4	23.7	18.5	9.4	22.9	21.6	23.7	20.9	29.6	25.7	27.7	30.4	16.3	28.5	24.8	
腸管出血性大腸菌感染症	0.0	0.9	12.6	4.9	7.7	4.8	4.7	0.0	2.4	2.4	3.8	0.0	6.6	7.6	0.0	0.0	1.4	3.3	
アメーバ赤痢	2.0	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	2.4	3.3	2.4	0.0	3.8	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	1.4	2.0	
後天性免疫不全症候群	0.0	0.0	0.0	0.2	1.4	0.0	0.0	0.0	1.2	3.0	2.8	14.8	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	
レジオネラ症	1.3	0.0	0.0	0.4	1.4	0.0	3.5	0.8	0.0	0.0	0.0	7.4	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	1.3	
急性脳炎	0.7	0.9	0.0	0.7	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	6.6	2.5	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
麻疹	1.3	0.0	0.0	0.4	0.0	4.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	
梅毒	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	2.5	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	1.3	
A型肝炎	0.7	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	1.2	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	
デング熱	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	1.9	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
マラリア	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
ウイルス性肝炎	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	
クロイツフェルト・ヤコブ病	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	1.2	0.0	0.9	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
細菌性赤痢	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
パラチフス	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	1.2	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	
E型肝炎	0.7	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
ライム病	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
ジアルジア症	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	
髄膜炎菌性髄膜炎	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

*：感染率については、表 2. に示した。

2010 年は京都府内での EHEC 症の患者発生が 54 人と非常に多く、患者数でも京都市を上回った。また、麻しんの報告は京都府内の方が多く傾向がみられた。しかし、保健所管轄地域間で比較するといずれの感染症も感染率のばらつきが大きく、特に患者発生数が少ない感染症では一定の傾向がうかがえない結果となった。

一方、京都府を含め近畿地方の結果を全国と比較すると、全国的には比較的多く発生しているツツガムシ病と日本紅斑熱の患者発生が少ないこと（京都府ではいずれも患者発生なし）などの特徴がみられた。

3. 2010 年の疾患別の特徴

京都府で患者報告数が多かった結核、EHEC 症、アメーバ赤痢、後天性免疫不全症候群、レジオネラ症については、京都府内の患者報告例も合わせて後述する。

2009 年と同様、京都市に比べ京都府内は麻しんの報告が多かった。京都府内 9 人の内訳は、麻しんは 6 才男性 1 人、3 才男性 1 人、1 才男性 1 人女性 2 人、0 才女性 1 人、修飾麻しん（不完全な免疫で麻しんウイルスに感染し、軽症の不全型麻疹症状を示す）は 39 才と 3 才の男性と 1 才の女性各 1 人の 3 人で、成人麻しんの発生はなかった。麻しんは 2007 年に成人麻しんが流行したことを受け、2008 年 1 月から全数把握感染症に新たに指定された。京都府でも 2008 年は 193 人の報告があり²⁾、京都府内は 87 人（うち 15 才以上の成人麻しん例は 60%）であった⁴⁾が、以降患者数は 2009 年は 11 人¹⁾、2010 年 11 人と減少した。2010 年に全国では 455 人の患者報告があり、20 歳未満の発生が 62%（10 歳未満は 47%）、20 代 13%、30 代 14%であった。京都府では、2007-2008 年の成人麻しんの流行後、成人層の麻しん感受性グループがかり患やワクチン接種で免疫を獲得し、小児疾患としての麻しん報告に収束してきていると推測できるが、全国的には成人層の麻しん報

告も継続していることから今後も麻しんについてはその発生動向を注意深く見守る必要がある。

急性脳炎が 2009 年の 11 人¹⁾、2010 年 15 人と、インフルエンザ A 型 H1N1pdm 流行後、それ以前と比較すると報告数が増加した。2010 年の京都府内の 6 例は、インフルエンザ A 型 H1N1pdm による 40、12、2 才の男性とムンプスまたはマイコプラズマ感染が原因とされた 9 才男性、原因が不明の 9 才女性と 4 才男性の発生であった。

A 型肝炎は 2010 年 3 月を中心に全国的に diffuse outbreak が観測され、京都府の発生も 2006 年 2 例、2008 年 1 例、2009 年 1 例であったことに比べるとやや報告数が多く、京都府内の 4 人中 3 人は 2010 年 2 月と 3 月の発生であった。しかし、肝炎ウイルスが分離された 1 例の遺伝子解析からは全国の流行株との関連が否定された。

ライム病が京都府内で初めて 2 人報告され、その概要を表 4 に示した。

表 4. 2010 年に報告されたライム病症例

	症例 1	症例 2
性別	女性	男性
年齢	1 歳 3 か月	61 歳
住所地	舞鶴市	京丹後市
初診日	2010.6.1	2010.5.25
感染推定年月日	2010.5.20	不明
発病年月日	2010.6.25	2009.11.15
症状	遊走性紅斑	神経症状
診断法	WESTERN BLOT 法による血清抗体の検出	
感染機会等	野山によく出かける	不明

3-1. 結核

結核は 2007 年（平成 20 年）4 月 1 日に感染症法で全数把握が必要な二類感染症に追加され、NESID には感染症法で定められた届け出基準により、2007 年 14 週から

新たに結核菌の感染が確認された感染者の情報が集約されている。そのうち、感染者の詳細データを把握できる京都府内では、2007年194人、2008年247人、2009年266人、2010年225人が結核感染と診断された。結核のり患率（人口10万人あたりの新登録患者数）は年々減少しているが、地域差が非常に大きく、大都市でより高い傾向をみせる。京都府内では、中山間地域が中心の京都府北部では感染者数、感染率とも少なく、同様の傾向がみられた。

京都府内の結核感染者については2007-2008年の感染者について前報で報告した¹⁾が、今回2009-2010年の感染者を加えて改めて結核感染者の概要をまとめることと

した。2007年14週から2010年52週までに診断された京都府管轄保健所内結核感染者932人の病型分類の報告数と感染率を男女別に示した(表5)。結核発症者の病型は、報告年や男女による差はみられず、肺結核が最も多く、その他の結核では、結核性胸膜炎やリンパ節結核、肺結核との併発例でも結核性胸膜炎の報告が多く、前報と傾向は変わらなかった。結核発症者数は男性の方が多く、感染率でみるとさらに男性の方が多く2010年は1.7倍の感染率を示した。一方、無症状病原体保有者は、発症者とは逆に女性の方が明らかに多く、2010年は1.9倍女性の方が多い感染率となり、結核感染には明らかに性差があることが確認できた。

表5. 2007年から2010年に診断された京都府管轄保健所内結核感染者の病型分類

報告数	2007年		2008年		2009年		2010年		総計		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	総計
結核発症者	112	74	128	71	131	90	118	74	489	309	798
肺結核	85	53	105	47	105	61	72	50	367	211	578
肺結核及びその他の結核	2	0	6	4	8	6	9	1	25	11	36
肺結核(結核性胸膜炎を含む)	(2)	(0)	(5)	(2)	(4)	(3)	(6)	(1)	(17)	(6)	(23)
その他の結核	25	21	17	20	18	23	37	23	97	87	184
その他の結核(結核性胸膜炎)	(14)	(6)	(10)	(12)	(11)	(8)	(21)	(10)	(56)	(36)	(92)
その他の結核(リンパ節結核)	(5)	(7)	(2)	(2)	(3)	(8)	(2)	(7)	(12)	(24)	(36)
無症状病原体保有者	3	5	20	27	15	26	10	20	48	78	126
疑似症患者			1		4		2	1	7	1	8
合計	115	79	149	98	150	116	130	95	544	388	932
感染率	19.7	12.3	22.6	11.8	23.2	15.0	20.9	12.4			
結核発症者	19.9	11.7	18.5	7.8	18.6	10.2	12.8	8.3			
肺結核	0.5	0.0	1.1	0.7	1.4	1.0	1.6	0.2			
肺結核(結核性胸膜炎もあり)	(0.5)	(0.0)	(0.9)	(0.3)	(0.7)	(0.5)	(1.1)	(0.2)			
その他の結核	5.9	4.7	3.0	3.3	3.2	3.8	6.6	3.8			
その他の結核(結核性胸膜炎)	(3.3)	(1.3)	(1.8)	(2.0)	(1.9)	(1.3)	(3.7)	(1.7)			
その他の結核(リンパ節結核)	(1.2)	(1.6)	(0.4)	(0.3)	(0.5)	(1.3)	(0.4)	(1.2)			
無症状病原体保有者	0.7	1.1	3.5	4.5	2.7	4.3	1.8	3.3			
疑似症患者	0.0	0.0	0.2	0.0	0.7	0.0	0.4	0.2			
合計	27.0	17.5	26.3	16.3	26.5	19.3	23.0	15.9			

2007年、2008年は中嶋ら²⁾のデータを改変

()内は比較的多かった病型を示した。

2007年は14週からの診断数であるため、感染率は52週分のデータに換算した。

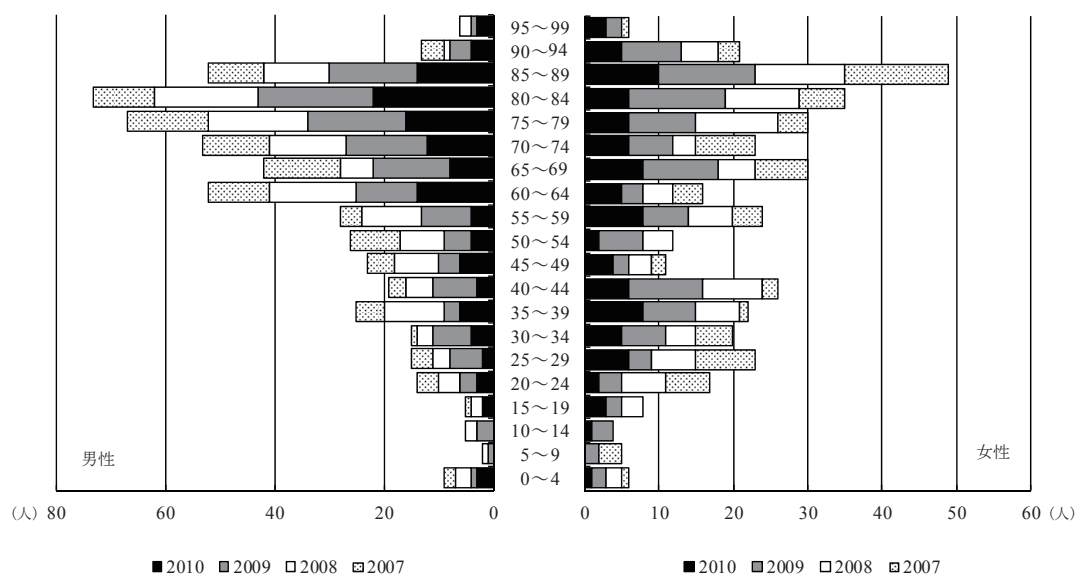


図2. 京都府管轄保健所内の結核感染者年齢階級別の報告数

5歳ごとの年齢階級に区分して、男女別に結核発症者802人と無症状病原体保有者数100人を年次別に分け、図2に示した。結核感染者は年齢階級別にみると年次ごとの報告数の差がさほど大きくないと考えられたので、2010年までにNESIDに蓄積された府内の感染者と2010年の全国の結核感染者の年齢別感染率を比較し、表6に示した。京都府内の結核発症者は70代以上の高齢者の割合が女性、男性ともに52%と高く、全国的女性55%、男性50%と同様、半数以上を占める結果となり、特に、80歳以上が全体の3分の1以上となった。感染率をみると女性は80歳、男性は70歳を契機に感染率が急増している。現在の高齢者世代は、結核が流行していた時代に青少年期を過ごし、結核の既感染者が多い世代でもあるため、免疫能が弱まり結核の発症が増加したと考えられるが、特に男性の感染率が非常に高かった。一方、京都府内の15歳未満の患者発生は1%以下で、全国同様若年層の患者発生は非常に少なかった。

無症状病原体保有者では、10代後半から50代まで加齢とともに増加する傾向を示し、若年層と高齢者では性差はほとんどないがそれ以外では女性の感染率が男性よりも高い傾向がみられた。これは結核感染の機会が加齢により増加し、感染機会に性差はないものの、女性の方が結核発症に至る場合が少なく、発症者の感染率とは逆に女性の方が高くなっていると考えられた。50代以降で無症状病原体保有者の感染率が減少するのは、発症者が増え始めることと無症状病原体保有者を診断する大きな

機会となる結核の接触者検診によるQFT検査の実施推奨年齢が2010年途中まで50代以下とされていたためではないかと考えられ、無症状病原体保有者の年齢別の感染率については今後推移を見守る必要がある。

3-2. 腸管出血性大腸菌感染症

EHEC症の最近5年間の京都府の保健所別の感染者数と感染率を表7に示し、また、京都府内のEHEC症感染者数の月別の発生消長を図3に示した。京都府の患者報告数は、最近5年間は、年100人前後を推移している。京都府内のみでは、2010年は34事例54人と事例数も感染者数も最も多かった。感染者数が春先から夏にかけて増加する傾向は毎年同じであるが、最近は冬季にもわずかなではあるが発生がみられるようになった。

京都府内の2006年4月から2010年のEHEC症の感染者194人の年齢構成を病型別と男女別に表8と図4に示した。京都府内の感染者は10歳未満で39%と多く、患者ではその割合は45%とさらに多くなった。また、年齢階級ごとの感染者の男女別の感染率をみると30代未満では男性の割合が高い傾向がみられたが、30代では女性の割合が高かった。40代以降では減少する傾向がみられ、60代でやや増加する傾向であった。京都府内の事例は家族内感染事例が多く、感染者は肉類の生食を含む肉類喫食の経緯がある事例がほとんどであった。

表6. 京都府管轄保健所内の結核感染者の年齢区分別感染率 (2007年から2010年)

年齢階級	結核発症者						無症状病原体保有者					
	京都府			全国 (2010年)			京都府			全国 (2010年)		
	女性	男性	総数	女性	男性	総数	女性	男性	総数	女性	男性	総数
0～4	0.0	2.4	1.2	0.6	1.1	0.8	6.0	6.4	6.2	5.9	5.7	5.8
5～9	3.7	0.0	1.8	0.6	0.3	0.4	1.8	1.8	1.8	2.5	2.2	2.3
10～14	0.0	0.0	0.0	0.8	0.4	0.6	2.4	2.9	2.7	2.2	2.5	2.4
15～19	0.8	1.2	1.0	2.8	3.7	3.3	2.5	0.9	1.7	2.8	4.0	3.4
20～24	6.6	7.8	7.2	8.0	8.8	8.4	4.2	0.8	2.5	6.0	4.6	5.3
25～29	7.8	5.0	6.4	9.4	10.1	9.8	4.4	2.4	3.4	6.4	4.4	5.4
30～34	11.4	10.2	10.8	8.2	9.1	8.7	5.8	2.5	4.2	6.2	4.4	5.3
35～39	13.9	23.9	18.6	9.7	12.1	10.9	6.3	3.0	4.8	7.1	4.7	5.9
40～44	11.4	16.1	13.7	7.1	13.3	10.2	11.4	2.1	6.9	7.4	5.0	6.2
45～49	12.7	19.4	16.4	7.1	13.7	10.4	2.6	7.7	5.4	7.0	5.0	6.0
50～54	4.4	15.8	9.9	5.7	13.3	9.5	2.2	1.8	2.0	4.4	3.3	3.8
55～59	9.8	15.5	12.5	6.0	16.6	11.2	2.4	0.0	1.3	3.0	2.7	2.9
60～64	9.1	30.0	19.3	9.4	28.1	18.5	0.0	0.0	0.0	2.1	3.0	2.5
65～69	21.8	33.5	27.5	12.8	32.2	22.1	1.4	1.5	1.5	1.5	2.0	1.8
70～	42.8	99.8	65.9	40.8	92.8	61.7	0.5	1.6	0.9	1.0	1.3	1.1
70～74	20.4	47.0	33.0				0.0	1.8	0.8			
75～79	28.7	79.3	51.2				0.0	2.3	1.0			
80～84	44.5	184	91.9				0.0	0.0	0.0			
85～89	101	247	145				3.9	0.0	2.7			
90～94	78.9	172	100				0.0	0.0	0.0			
95～99	90.0	317	138				0.0	0.0	0.0			

年齢階級別人口は平成17年度国勢調査結果を用いた。
 2007年、2008年は中嶋ら²⁾のデータを改変して使用
 2007年は14週からの診断数であるため、感染者数を52週分のデータに換算し用いた。

表7. 最近5年間の京都府保健所別の腸管出血性大腸菌感染症の報告数

報告保健所名	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
乙訓	1 (0.7)	4 (2.7)	6 (4.0)	2 (1.3)	0 (0.0)
山城南	3 (2.5)	1 (0.9)	1 (0.9)	6 (5.3)	1 (0.9)
中丹西	2 (2.5)	2 (2.5)	2 (2.5)	2 (2.5)	10 (12.6)
山城北	14 (3.2)	14 (3.1)	21 (4.7)	9 (2.0)	22 (4.9)
南丹	6 (4.1)	16 (11.0)	5 (3.4)	2 (1.4)	11 (7.7)
中丹東	1 (0.8)	5 (3.9)	5 (3.9)	3 (2.4)	6 (4.8)
丹後	0 (0.0)	5 (4.6)	2 (1.9)	2 (1.9)	4 (4.7)
京都市					
北	3 (2.4)	0 (0.0)	4 (3.3)	27 (22.2)	0 (0.0)
上京	5 (6.0)	4 (4.8)	6 (7.3)	8 (9.7)	2 (2.4)
左京	2 (1.2)	5 (3.0)	7 (4.2)	11 (6.6)	4 (2.4)
中京	22 (21.5)	3 (2.9)	12 (11.6)	10 (9.6)	4 (3.8)
東山	2 (4.8)	1 (2.4)	1 (2.4)	2 (5.0)	0 (0.0)
山科	2 (1.5)	6 (4.4)	4 (2.9)	5 (3.7)	9 (6.6)
下京	1 (1.3)	0 (0.0)	6 (7.9)	1 (1.3)	6 (7.6)
南	3 (3.1)	6 (6.1)	28 (28.4)	12 (12.1)	0 (0.0)
右京	3 (1.5)	11 (5.4)	3 (1.5)	3 (1.5)	0 (0.0)
伏見	10 (3.5)	8 (2.8)	10 (3.5)	12 (7.9)	4 (1.4)
西京	3 (1.9)	10 (6.5)	5 (3.3)	2 (0.7)	5 (3.3)
京都府内	27 (2.3)	47 (4.0)	42 (3.6)	26 (2.2)	54 (4.6)
<京都府内事例数>	<19事例>	<28事例>	<31事例>	<21事例>	<34事例>
京都市	56 (3.80)	54 (3.68)	86 (5.86)	93 (5.48)	34 (2.31)
京都府全体	83 (3.14)	101 (3.83)	128 (4.86)	119 (4.16)	88 (4.86)
近畿2府4県	600 (2.87)	888 (4.26)	626 (3.00)	592 (2.84)	681 (3.00)
全国	3819 (2.99)	4617 (3.61)	4322 (3.38)	3886 (3.05)	4131 (3.38)

京都府内は、京都市以外の京都府内保健所からの報告数を示す。

事例数は詳細感染者情報から求めた。

() 内は感染率で、当該年度10月1日現在の推定人口を用いて、対人口10万人あたりの感染者数を示す。

2006～2008年は中嶋ら²⁾より改変、2010年のデータは再掲

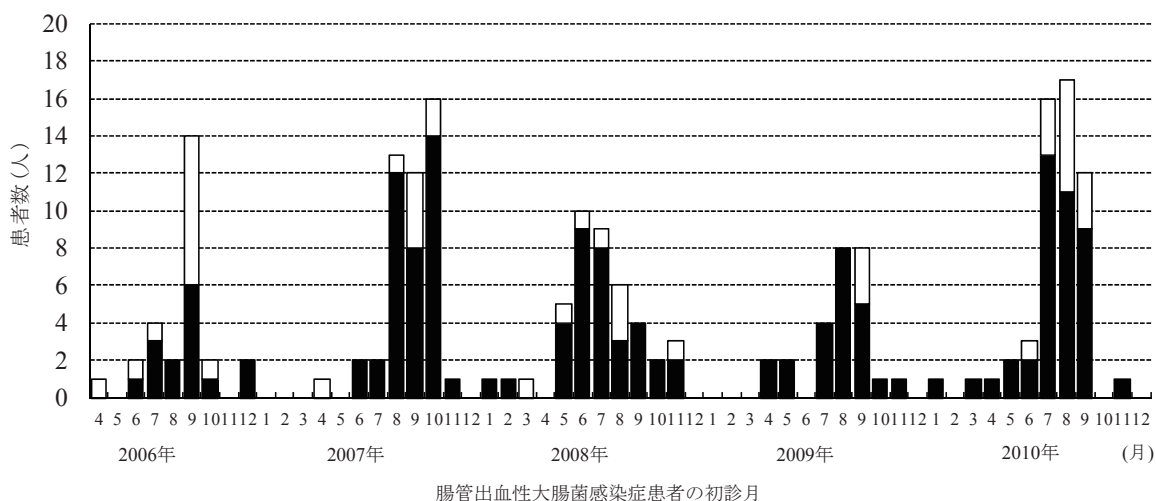


図3. 京都府管轄保健所管内の腸管出血性大腸菌感染症患者の初診月別報告数 (2006年4月～2010年12月)

■：患者、□：無症状病原体保有者

2006～2008年のデータは中嶋ら(2008)を改変

3-3. アメーバ赤痢

2006年から2010年に報告された京都府内のアメーバ赤痢感染者27人の病状等をまとめ、表9に示した。感染者の多くは男性で、40代と50代が多かった。推定感染地域は、国内が22人、海外が5人で、病型は腸管アメーバ症が多かった。また、臨床症状を示さない感染者が6人であった。

3-4. 後天性免疫不全症候群

2006年から2010年に報告された京都府内の後天性免疫不全症候群感染者17人をまとめ、表10に示した。例数は少ないが、感染者の多くは男性であった。17人中AIDS発症者は5人、無症候性キャリアは6人であった。

表 8. 京都府管轄保健所内の腸管出血性大腸菌感染症感染者の年齢区分別報告数 (2006年から2010年)

年齢階級	患者						無症状病原体保有者					
	女性		男性		総数		女性		男性		総数	
	報告数	感染率	報告数	感染率	報告数	感染率	報告数	感染率	報告数	感染率	報告数	感染率
10歳未満	32	(12.5)	36	(13.6)	68	(13.1)	2	(0.8)	6	(2.3)	8	(1.5)
10代	10	(2.1)	11	(2.2)	21	(2.1)	3	(0.6)	4	(0.8)	7	(0.7)
20代	8	(1.7)	14	(3.2)	22	(2.4)	3	(0.7)	4	(0.9)	7	(0.8)
30代	10	(3.6)	4	(1.5)	14	(2.6)	7	(2.5)	3	(1.1)	10	(1.8)
40代	2	(0.9)	2	(0.8)	4	(0.9)	2	(0.9)	2	(0.8)	4	(0.9)
50代	2	(0.4)	3	(0.7)	5	(0.6)	2	(0.4)	2	(0.5)	4	(0.5)
60代	7	(1.8)	4	(1.1)	11	(1.4)	1	(0.3)	1	(0.3)	2	(0.3)
70代	4	(1.4)	0	(0.0)	4	(0.8)	1	(0.4)	1	(0.4)	2	(0.4)
80代	0	(0.0)	1	(1.3)	1	(0.4)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)

感染率は人口10万人あたりの感染者数とし、年齢階級別人口は平成17年度国勢調査結果を用いた。

2006年～2008年は中嶋ら²⁾のデータを改変して使用

2006年は4月からの診断数であるため、感染者数を52週分のデータに換算し感染率を計算した。

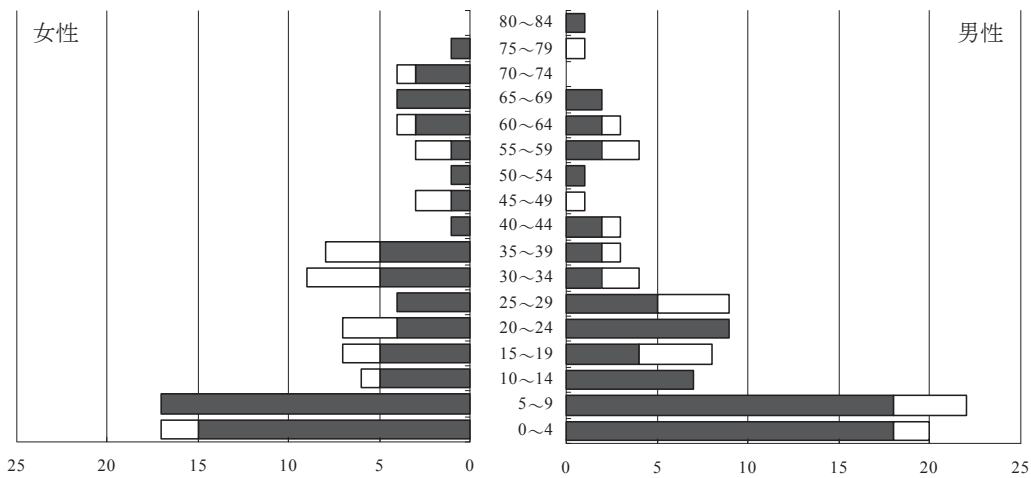


図 4. 京都府管轄保健所管内の腸管出血性大腸菌感染症患者の年齢階級別報告数 (2006年4月～2010年12月)

■：患者、□：無症状病原体保有者

2006～2008年のデータは中嶋ら(2008)を改変

表 9. 京都府内のアメーバ赤痢感染者 27 人の概要 (2006年～2010年)

患者所見	人数 (発生割合)	患者所見	人数 (発生割合)
年齢階級		病型	
10代	1 (4%)	腸管アメーバ症	22 (81%)
20代	2 (7%)	腸管外アメーバ症	4 (15%)
30代	2 (7%)	腸管及び腸管外アメーバ症	1 (4%)
40代	9 (33%)	臨床症状	
50代	9 (33%)	下痢	15 (56%)
60代	3 (11%)	粘血便	8 (30%)
70代	1 (4%)	しぶり腹	1 (4%)
性別		鼓腸	1 (4%)
男性	25 (93%)	腹痛	9 (33%)
女性	2 (7%)	発熱	4 (15%)
感染地域 (推定)		右季肋部痛	0 (0%)
国内	22 (81%)	肝腫大	0 (0%)
国外	5 (19%)	肝膿瘍	5 (19%)
		腹膜炎	1 (4%)
		胸膜炎	0 (0%)
		心嚢炎	0 (0%)
		便潜血陽性	5 (19%)
		大腸がん(アメーバ赤痢の症状なし)	1 (4%)

表 10. 京都府内の後天性免疫不全症候群 17 人の概要
(2006 年～2010 年)

患者所見	報告数 (人)	(発生割合 %)
病型		
患者*1	10	(59%)
無症状病原体保有者*2	7	(41%)
年齢階級		
10 代	1	(6%)
20 代	4	(24%)
30 代	4	(24%)
40 代	3	(18%)
50 代	2	(12%)
60 代	2	(12%)
70 代	0	(0%)
90 代	1	(6%)
性別		
男性	16	(94%)
女性	1	(6%)
感染原因 (推定)、複数回答あり		
異性間性的接触	10	(59%)
同性間性的接触	4	(24%)
不明	4	(24%)

AIDS患者は5人(29%)
無症候性キャリアは6人(35%)

表 11. 京都府内のレジオネラ症 21 人の概要
(2006 年～2010 年)

患者所見	人数 (発生割合)	患者所見	人数 (発生割合)
病型		臨床症状	
肺炎型	21 (100%)	発熱	20 (95%)
年齢階級		肺炎	20 (95%)
50 代	5 (24%)	咳嗽	13 (62%)
60 代	5 (24%)	呼吸困難	11 (52%)
70 代	8 (38%)	腹痛	0 (0%)
80 代	2 (10%)	下痢	1 (5%)
90 代	1 (5%)	意識障害	1 (5%)
性別		多臓器不全	0 (0%)
男性	16 (76%)	発生時期	
女性	5 (24%)	3月～5月	4 (19%)
感染経路 (推定)		6月～8月	9 (43%)
水系	6 (29%)	9月～11月	4 (19%)
不明	15 (71%)	12～2月	4 (19%)

3-5. レジオネラ症

2006 年から 2010 年に報告された京都府内のレジオネラ症感染者 21 人の病状等を表 11 に示した。感染者は男性 16 人と女性よりも 3 倍以上報告が多かった。また、すべて 50 代以上で肺炎型患者であった。9 人が 6 月から 8 月の発生であった。入浴施設利用など水系感染が疑われる例が 6 人であった。

謝辞

患者情報収集にご尽力いただきました医療機関ならびに保健所の皆様に深謝します。

引用文献

- 1) 中嶋智子, 奥村真友美, 柳瀬杉夫. 2010. 2009 年感染症発生動向調査 (患者発生動向) - 全数把握感染症. 京都府保健環境研究所年報, 55, 41-44.
- 2) 中嶋智子, 奥村真友美, 棟久美佐子, 柳瀬杉夫. 2009. 京都府感染症情報センター 感染症発生動向調査 (2008 年) 全数把握感染症. 京都府保健環境研究所年報, 54, 15-19.
- 3) 中嶋智子, 奥村真友美, 棟久美佐子, 柳瀬杉夫. 2009. 京都府感染症発生動向調査 - 結核感染者の発生動向 (2007 年 -2008 年). 京都府保健環境研究所年報, 54, 26-29.
- 4) 棟久美佐子, 中嶋智子, 奥村真友美, 柳瀬杉夫, 岡嶋伸親. 2009. 京都府の麻しん患者の発生状況 (2008 年) - 京都府感染症発生動向調査. 京都府保健環境研究所年報, 54, 30-33.